国立大学法人 大阪教育大学
大阪教育大学 附属特別支援学校

丹沢 正太・金 憲央・深草 武志・大原 健哲
村山 希世・森 久美子・森下 紘菜
共同研究者　大内田 裕（特別支援教育部門）

知的障害特別支援学校高等部における作業能力の向上をめざしたアプローチ

キーワード：環境調整、最大限の能力発揮、方法論、評価指標

Ⅰ．本実践研究の背景と目的

特別支援学校の教員として、個々の障害特性や援助を必要としながら、生徒一人ひとりが最大限の能力を発揮し卒業後の進路先で活躍する「めざす将来像」として、学校教育段階での個別の教育的ニーズにそった適切な指導・支援のあり方としてどのような手立てが必要なのか。その問いに、丹沢・平井（2023）は卒業後の移行支援の課題として「高等部卒業という移行期における教育的アプローチをどう進めていくのか、今後は切れ目のない具体的な指導・支援の方策などを実践的、研究的に取り組む必要性がある。」と示唆した。

その課題を踏まえ、本研究は、知的障害特別支援学校高等部における作業能力の向上をめざした実践的、研究的な指導・支援のアプローチモデルの一考察として、個別に最適な環境調整を行うことにより、課題のパフォーマンスがどの程度変化するのか、またどの程度共通しているのかを明らかにすることを目的とする（図１）。

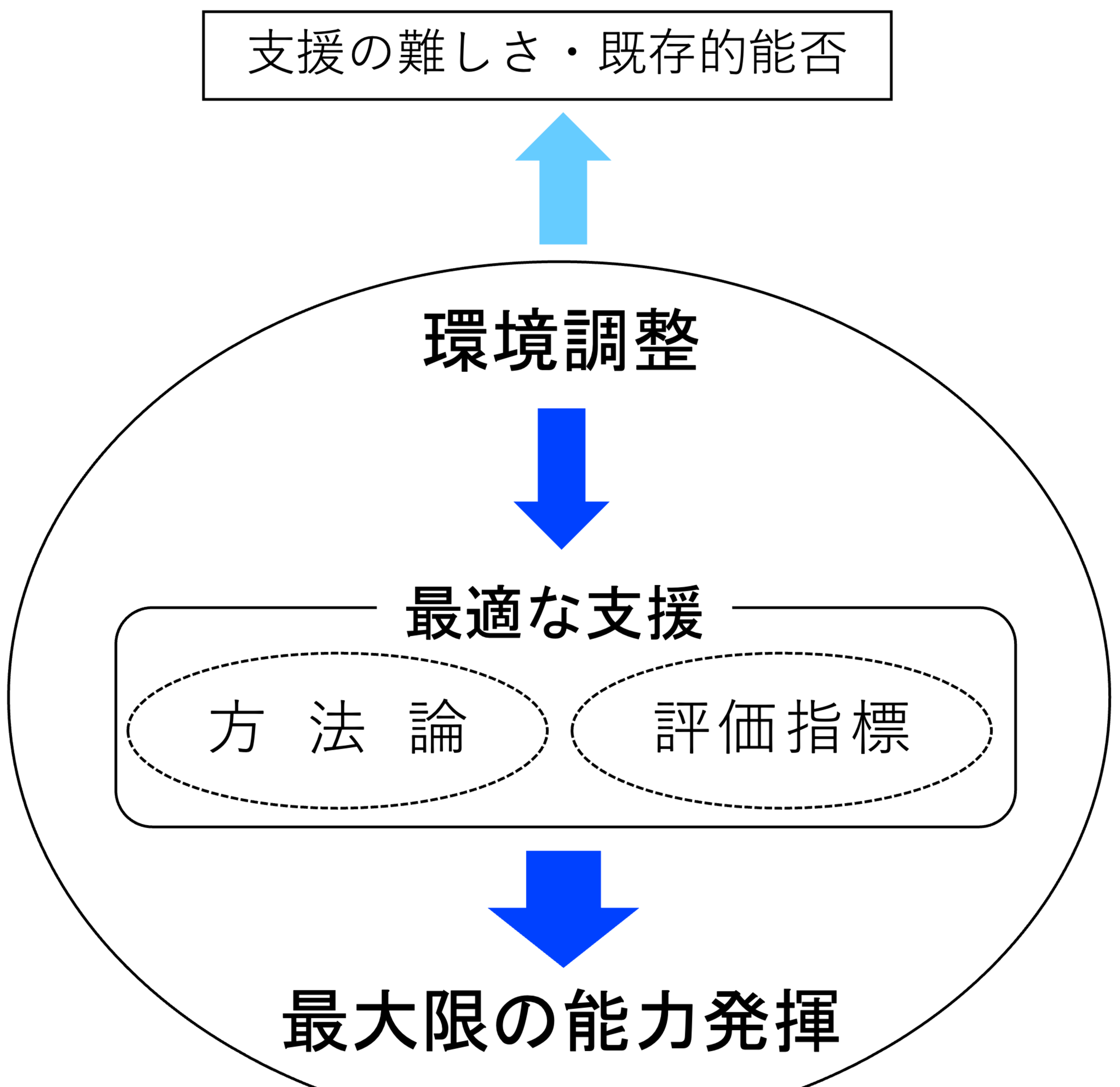

図１　本研究概念図

Ⅱ．作業能力の向上をめざしたアプローチ

１．研究方法

【実践期間】実践期間は令和５年11月１日（水）～12月22日（木）であった。

【研究対象】知的障害特別支援学校高等部３年生２名（以下、生徒A、生徒B）

【倫理的配慮】大阪教育大学倫理委員会（番号23093：令和５年10月27日付）の承認を受けて実施した。対象者である保護者には改めて依頼文書と説明文書を用いて詳細に研究の趣旨を説明し、同意書への署名と提出により同意を得た。倫理的配慮としても、個人が特定されないようにイニシャル、ナンバリングでの表記個人情報の取り扱いについては十分配慮した。

【実践内容】ペグ差し、袋詰めの２種類の作業能力課題を実施し、作業能力のパフォーマンス向上を図るために環境整備や個別支援（感覚器の調整等）を講じた。個人の最適な環境調整については、ペグ差しは90°・60°・30°の傾斜角度の自助具（右図２）や滑り止めシートを活用した。袋詰めについては、視覚的教示（右図３）から題材の位置や向きなど個人の最適な身体の動きの調整や言葉かけの教示を行い、作業能力課題（下図４、５）のパフォーマンス変化を探究した。

【分析方法】実践の様子を動画で撮影し、動画記録から角度の算出、時間の計測、身体の動きの要素等を解析した。

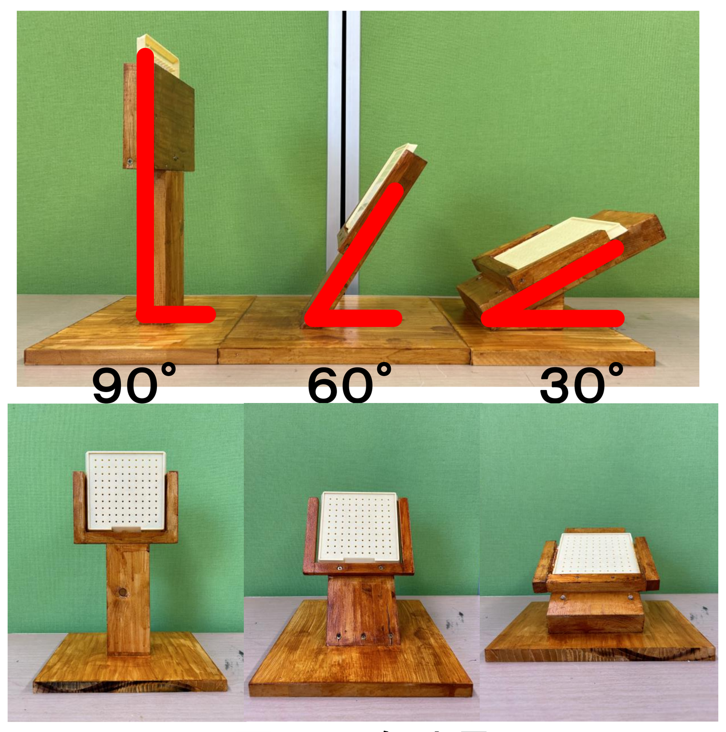

図２　自助具

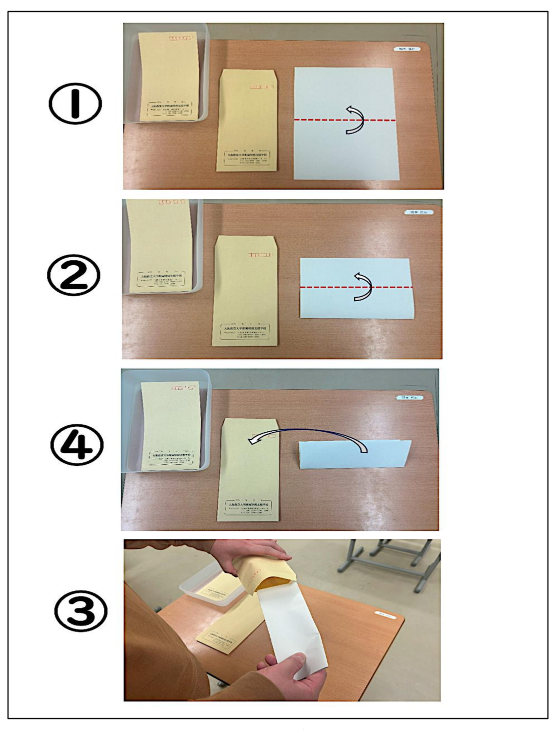

図３　視覚的教示

図４　作業能力課題の様子（生徒Ａ）

図５　作業能力課題の様子（生徒Ｂ）

２．実践の評価指標

障害者職業総合センター（2009）の「就労支援のためのチェックリストの活用の手引き」を参照し、各障害に共通した就労する前の基本的な職業的課題を集約した４領域（Ⅰ日常生活、Ⅱ対人関係、Ⅲ作業力、Ⅳ作業への態度）の28項目のなかで、本実践ではⅢ作業力の正確性、器用さ、作業速度に着目した独自の作業能力課題ルーブリックを作成し評価した（表１）。

表１　作業能力課題ルーブリック

	4	3	2	1
ペグ差し（100個）	４分以内で、作業課題のペグ差しを100個入れることができる。	６分以内で、作業課題のペグ差しを100個入れることができる。	８分以内で、作業課題のペグ差しを100個入れることができる。	作業課題が10分以上かかる。
袋詰め（10枚）	全工程において５分以内に終え、且つずれもなく見本通りに丁寧に袋詰めができる。	全工程において８分以内に終え、且つ３つまでのずれはあるが見本通りに概ね丁寧に袋詰めができる。	全工程において９分以内に終え、且つ６つまでのずれはあるが、見本通りに袋詰めができる。	全工程において10分以上かかり、且つ見本通りに袋詰めができない。

※別途、時間や正確性を計った。

Ⅲ．結果

ペグ差し、袋詰め２種類の作業能力課題の結果は以下の通りである。

①ペグ差し（100個）・・・介入前後での作業能力課題ルーブリックでは以下のような結果となった（図６）。作業速度は以下のような結果となった（図７）。

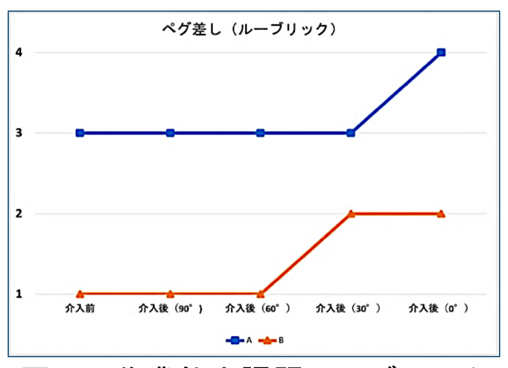

図６　作業能力課題ルーブリック

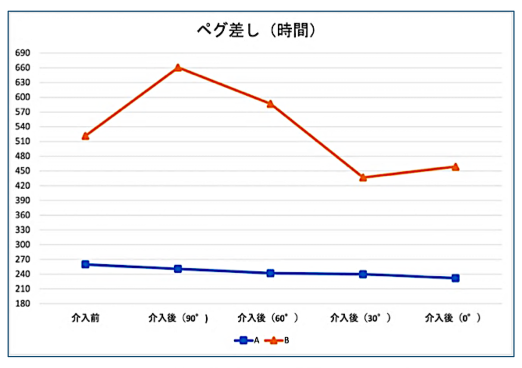

図７　作業能力課題の時間

②袋詰め（10枚）介入前後での作業能力課題ルーブリックでは以下のような結果となった（図８）。作業速度、正確性は以下のような結果となった（図９、10）。

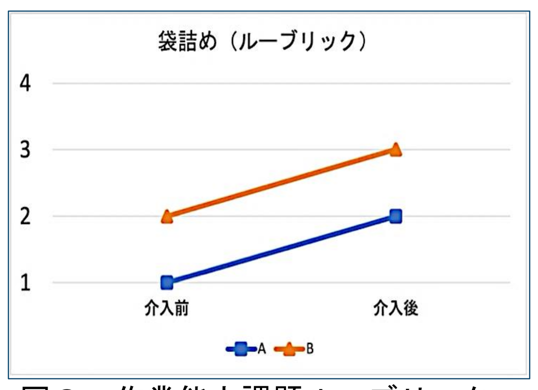

図８　作業能力課題ルーブリック

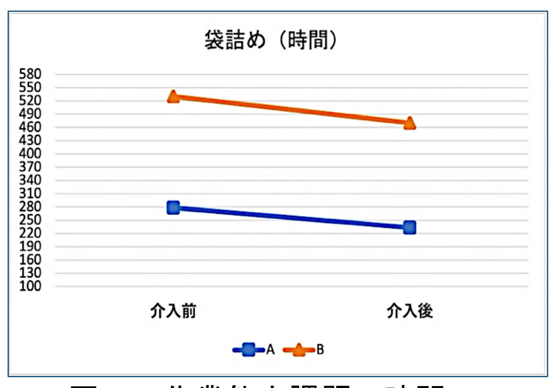

図９　作業能力課題の時間

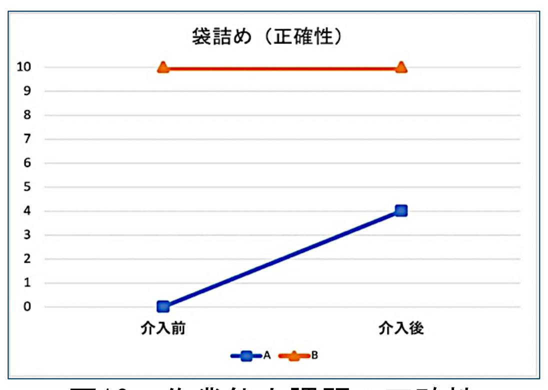

図10　作業能力課題の正確性

Ⅳ．考察と今後の展望

本実践では、運動機能に特徴的な動きのある生徒が個別に最適な環境調整を行うことでの作業能力の向上をめざした教育的アプローチの重点として、ペグ差し課題においての運動を①掴む②調整③入れるという３つの最小限の運動要素（フェーズ）に分けてアプローチや配慮を考えることで、最も支援が必要な要素にアプローすることができ、最大限の能力発揮を見出すことができたと考えられた。

一方で評価指標では、幅広い障害特性をみて図ることや個々の実態を捉えたルーブリックとして、様々な学校現場や進路先の事業所等で活用できる指標となるように、この取り組みを省察しながら実践的、研究的にパフォーマンスの向上をめざすアプローチ方法を検証していきたい。

Ⅴ．文献

丹沢正太・平井美幸（2023）：「知的障害特別支援学校の移行支援にライフキャリアの概念を取り入れる試みー保護者ニーズを踏まえた移行支援計画の考察ー」，大阪教育大学附属特別支援学校研究紀要，87－92

障害者職業総合センター（2009）：「就労支援のためのチェックリストの活用の手引き」，16，独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構，株式会社成光社

等